

二言語併用者の諸問題

—言語心理学の立場より(その1)—

小林 素文

Psycholinguistical Approach to the Study of Bilingualism (1)

Motofumi Kobayashi

0. はじめに

二言語併用(者)に関する研究は、主に言語学・心理学・社会学という三つの分野にまたがっており、それは相互に関連し合っている。

言語学の立場からは主に、言語干渉(interference)の問題がとりあげられる。たとえば、日本語と英語が共に使用出来る人が“足”と“foot”を同じ意味でとらえている場合、「私は足が長い」という文を英語で話す時に、“I have long legs”とは言えず“I have long feet”と間違えて言ってしまう現象とか、英語の語彙が日本語を話している際にも入ってしまう現象といったような二言語使用できることから、片一方(場合によっては両方)の言語がその影響を受ける事つまり言語干渉の問題を、言語学では主な研究テーマとしている。さらに個人における言語干渉が集団のレベルでおこなわれるようになると、混成言語の問題にまで発展してくる。アフリカの諸国では統一国となってもその国の中には、色々な部族が住み、それぞれ別個の言語が話されている場合が多い。しかし、統一国となり、それぞれの部族間の交流が行なわれるようになると、普通は、たとえば英語という共通語で異った部族同士が話し合う事になるが、そういう共通語を知らない場合、お互いにジェスチャーを交え、異った言語同士で何とか話し合っているうちに、どちらの言語にも属しない新しい言語—ピジン言語—が話されるようになる事がある。さらにそのピジン言語がその地域で一つの定着した言語となると、クレオールと呼ばれる新しい言語が生まれる事になる。こうしたマクロのレベルで行なわれる言語干渉の問題をも言語学ではとり扱う。

しかし、この言語干渉の問題にだけに、二言語併用(者)の問題をしぼっても、それは言語外の社会学的・心理学的要素が入らざるをえない。ワインライヒは、言語干渉の問題は、それが拡散するのか、消失するのか、どのような時におこるのか、という点に関しては、言語外の事象を考慮に入れなければ示されないのだとして、次のような事象をあげている。

- a. 話者がどのように二言語を使いわけているか。
- b. 二言語をそれぞれどの程度習得しているか。

二言語併用者の諸問題

- c. 話す内容と話す相手に対する言語の使い分け。
- d. 二言語のそれぞれに対する二言語併用者自身の感情。
- e. 二言語併用する地域の大きさと、その地域の社会的地位。
- f. 二言語のそれぞれに対する一般社会の人達の感情。
- g. 二言語併用者及び二言語併用社会に対する社会的感情。

このように、二言語併用における問題は、言語的な言語干渉という問題にしぼっても、心理学・社会学との関連性は大きい。具体的例で示せば²⁾、ニューヨークのフェルトリコからの移住者の子供は、全て英語で授業の行われる一般のアメリカ人の子供が通う小学校へ行くようになって、スパニッシュアクセントがぬけ切れない子供がいるが、一方、カナダのケベックにおけるアメリカ人の子供が全て仏語で授業の行われている小学校へ通うようになると、完全に仏語をマスターするといった2つの相反する事実は、子供が置かれている社会的地位、そしてそこからおこる子供の社会に対する感情を考慮に入れなければ説明がつかないのである。

このシリーズの目的は、二言語併用(者)の問題に対しての、心理学・社会学・言語学の立場からの研究を具体的に紹介していき、二言語併用(者)の問題の全体像を明らかにしてゆく事にある。紹介するといってもそのすべてを網羅する事は技術的に不可能な事であり、そこには選択の問題が入ってくるが、この選択の中に筆者の持つ二言語併用(者)の問題に対する見解が含まれてくるが、この事は最終章で述べたい。本稿では言語心理学の立場から、言語と文化との密接なつながりが、二言語併用者の場合どのようにとらえられるのか、という点について言及していく。

1.1. 言語と社会・文化

宇宙間の事物・現象というのは、数限りなく存在し、それを全て言葉として表現する事は、脳細胞の限られている人間にとって到底不可能な事である。従ってそれぞれの事物・現象に対して、その社会での必要範囲内での名称が与えられたり、表現されたりする。

虹の色の、言語における名称のつけ方については、普通「虹は七色」といわれるが、これは七色の名称を虹につけている言語を使う人達に依る事で、そうではない言語を使う人達にはあてはまらないのである。例えば³⁾、ローデシアの言語シヨナでは、虹の色を四色にしか分けていないし、リベリアの言語バッサでは二色にしか分けていない。従って、シヨナ語を話す人達にとっては「虹は四色」であるし、バッサ語を話す人達にとっては「虹は二色」なのである。では虹は実際には何色あるのであろうか。答えは、虹は無数の色の連続的变化であるから「虹は無限色」というのが物理的事実に照らして正しいのである。

この事は、言語というのは、無限の事実を有限の枠組でとらえていくという事を示していると共に、有限の枠組でのとらえ方は、それぞれの言語により異っているという事をも示している。この有限の枠組でのとらえ方が言語により異っているのは、決してそれぞれの言語を使う人達の認識活動における差異ではなく、それぞれの言語の使われている社会の文化的反映であ

る場合が多い。例えば⁴⁾、オーストラリアの原住民の中で、ワニと原住民とは祖先が同じであるとみなされている社会では、ワニと人間とが同じ枠の中に入れられている程である。

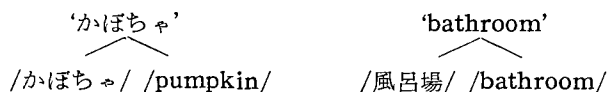
ある事物に対して、二つの言語の中で、共に名称が与えられていても、それが必ずしも同一の事物を差し示すとは限らない場合もある。例えば日本語における /風呂場/ という名称は、英語では /bathroom/ という名称が与えられているが‘風呂場’=‘bathroom’とはいえない。(/ / は音声記号を ‘ ’ は意味を示すものとする。以下同。) もし初めて日本にきたアメリカ人のメアリーさんが、日本の家庭を訪問した時、その席上で “Where is a bathroom?” といったので、メアリーさんを風呂場へ案内したとすれば、メアリーさんは、まごついてしまうであろう。なぜならば、メアリーさんの言わんとした事は、「トイレはどこですか」と聞いているからである。こうした誤解の生じるのは、日本とアメリカの家屋の構造の違いからおこるのである。日本の一般の家庭では、トイレと風呂場とは別の場所になっているが、アメリカでは、トイレと風呂場が一つの仕切りの中にあり、その一つの仕切内を /bathroom/ と呼ぶからである。従って家庭の中でゲストが “Where is a bathroom?” といえ、大抵の場合、「トイレはどこですか」と聞いているのである。この事から‘風呂場’=‘bathroom’ではないという事は明らかであろう。同様に、‘かぼちゃ’=‘pumpkin’では決してない。日本人の太郎君が初めてアメリカに行き、“Pumpkins are delicious. I used to eat pumpkins almost every day at this time of the year.” といったとすると、日本の事情を知らないアメリカ人は、太郎君をかぼちゃなどを食べなくてはいけない家庭に育ったかわいそうな人だと思ってしまうであろう。こんな風に思われるのも、日本のかぼちゃは、皮もやわらかく、食用としているのに対して、アメリカのかぼちゃは、日本のと比べれば非常に大きくて皮もかたく、パンプキンパイというようにかぼちゃの風味を利用する事はあっても、とてもそのままの形で食用とする事はなく、そのまま食べるのは貧しい人達に限られているからである。従って‘かぼちゃ’=‘pumpkin’ではない所に誤解の生ずる原因があったのである。

全く同じ事物を差し示す名称を二つの言語で有していても、それが同じ意味合いを持ってはいない。例えば‘月’=‘moon’というのは物理的には事実であるが、そのことばから引き起こされる意味合いは言語により異っている。日本人にとって /月/ と聞けば、月見、ダンゴ、スキ、秋等が連想されるが、英米人が /moon/ と聞いて、そうした事柄を思い浮かべるはずがない。従って連想的意味合いを加えれば、‘月’=‘moon’では決してない。そして連想的意味合いは、そのことばの話されている社会の文化と密接なつながりを持っているのである。

このように、それぞれの言語は、その言語の使われている社会の文化と密接なつながりを持っている。いいかえれば、その社会の文化の反映が、その社会の言語であるといってもいい程である。

1.2. 一文化二言語併用者 (Compound bilingual)

一文化二言語併用者というのは、二つの言語の記号が同一の文化状況に帰せられている個人をいう。この事は、例えば /かぼちゃ/ と /pumpkin/ を共に、日本社会における意味‘かぼちゃ’としてとらえていたり、/bathroom/ と /風呂場/ を共にアメリカ社会での意味‘bathroom’としてとらえている者の事である。図示すれば下図の如くなる。



こうした一文化二言語併用者になるものとして、エルヴィンとオスグット⁵⁾は、次の二つの状況を理論的に示した。一つは「自国の文化の中で、外国語を学習する事により、母国語と合わせて、二言語併用者になった者」である。このエルヴィンのあげる状況が正しいとすれば、日本では中学校から学校教育の中で外国語として英語を学んでいるわけであり、こうした状況で英語をほぼ完全にマスターしていったにしても、その人は一文化二言語併用者にすぎず、もし初めてアメリカに行く機会を持った時、そこで“I like pumpkins. I used to eat pumpkins every day.”というような発話を、アメリカ人にとられる意味合いを知らずに、する事になる。

エルヴィンのあげる、もう一つの状況は「小さい時から、二言語が同じ状況下で使われている家庭に育って、二言語併用者となった者」である。この事が正しいとすれば、日本社会の文化の中で暮らして、父親が日本人で日本語を、母親がアメリカ人で英語を話している家庭に育った子供は、二つの言語を完全にマスターしたとしても、一文化二言語併用者にすぎず、トイレに行きたい時“Where is a bathroom?”という発話は生まれぬ事になる。

1.3. 二文化二言語併用者 (Coordinate bilingual)

二文化二言語併用者とは、二つの言語を用いる際、それを、それぞれの二つの文化状況に合致して用いる事のできる個人の事である。この事は、例えば、/かぼちゃ/ /風呂場/ という時は、日本社会で使われる‘かぼちゃ’‘風呂場’であり、/pumpkin/ /bathroom/ という時は、アメリカ社会での‘pumpkin’‘bathroom’と使い分けれる個人の事である。図示すれば下図の如くなる。



こうした二文化二言語併用者になるものとしてエルヴィンとオスグット⁵⁾は、次の二つの状況を理論的に示した。一つは「一方の言語は家庭の中で、もう一方の言語は学校や仕事の中で使われる事により、二言語併用者になった者」である。この事が正しいとすれば、日本社会で日本人の間に生まれた子供が、アメリカンスクールに通うようになるとすれば、その子供は、二文化二言語併用者となるわけであり、/bathroom/ と /風呂場/ をそれぞれの状況に応

じて使い分ける事になるはずである。エルヴィンのあげるもう一つの状況は「外国語をその言語の話されている国で獲得していった者」である。この事から推察すると、中学校から数年アメリカに留学し、英語を獲得した日本の学生などは、日本語と英語の二文化二言語併用者であるといえる。

1.4 中間的区分

上記で明らかな様に、言語というのは、その言語の使われている社会の文化を反映している。そして、二言語併用者は、二言語使用は出来るが一方の言語の文化しか、それぞれの言語に反映できない一文化二言語併用者と、二言語使用できしかもそれぞれの言語の文化に合わせて、二言語を使い分けれる二文化二言語併用者とに理論的には分けられる。しかし、二言語併用者は全てこの二つのタイプに分けられるという事ではなく、大多数の二言語併用者は、二文化二言語併用者を一方の極に、一文化二言語併用者をもう一方の極においた直線上のどこかに位置するのである。従って、/かぼちゃ/ と /pumpkin/ は同一の文化状況に帰しても /bathroom/ と /風呂場/ はそれぞれの文化状況に応じて使い分けられる二言語併用者もいるわけである。

2. 2つのタイプの実験的証明

ランバート、ハヴェルカ、とクロスビー⁶⁾は共同で、「二言語を一つの文化体系の中で学んではきた者は、二つの言語の機能上の区別が余り出来ないが、一方、二言語を別々の文化体系の中で学んだ者は、機能上の区別をそれぞれの言語に対してできる」という事つまり一文化二言語併用者と二文化二言語併用者の存在を実験的に証明した。この実験における被実験者は、大学院生及び大学院へ入学予定の大学生であり、各種のテストを行った結果、英語と仏語が同程度に、しかも、母国語のように使える二言語併用者32名である。

まず、この32名の被実験者を、二言語をどの様にして習得したかにより二つのグループに分ける。一つのグループには、個別環境 (separated context)^{*1} で二言語を学んだ者が入り、もう一方のグループには、同一環境 (fused context) で二言語を学んだ者が入る。この二つのグループに対して、3つのテストを行っているが、ここではその一つだけを紹介する。それは意味微分法 (semantic differential) である。

意味微分法とは、ある名称に対して、いくつもの測定尺度を持ち、その一つ一つは七つの区分があり、その両極は正反対の意味の形容詞から成り立っている。例えば下図の如くである。

*1. Separated context は、さらに bi-cultural context と uni-cultural context というように細分化されているが、ここでは、bi-cultural context の場合のみ取り扱う。

二言語併用者の諸問題

	‘父’		
「嬉しい」	_____ × _____		「悲しい」
「堅い」	_____ × _____		「柔らかい」
「遅い」	_____ × _____		「早い」
	⋮		

このようにして、被実験者の‘父’という概念に対する意味を測定するものである⁷⁾。

ここでは、この意味徴分法を一回目には英語で ‘house’ ‘drink’ ‘poor’ ‘me’ という四語について全て英語の状況下で行ない、二回目には、この四語を仏語でおきかえ全て仏語の状況下で行なった所、個別環境で二言語を習得した者は、一回目と二回目の実験結果には大きな差異が認められたが、同一環境で二言語を習得した者は、二つの実験結果にほとんど差異が認められないということがわかった。この事は個別環境で二言語を習得した者は、同一概念でも英語と仏語とでは意味が異ってくるが、同一環境の場合には、同一概念は英語、仏語とことばを変えても意味の差は生じない事を示している。上記実験で区別している、同一環境と個別環境はエルヴィンとオスグットがあげた、一文化二言語併用者と二文化二言語併用者になりやすい状況と、それぞれ対応しており、この実験結果はこの二つの二言語併用者のタイプの存在を証明しているといえる。

ランバートとフィレンバウム⁸⁾は共同で、二言語併用者であった失語症患者を、どのようにして二言語を獲得していったかにより、二文化二言語併用者と一文化二言語併用者に分け、いろいろな角度から調査していき、次のような事を主張した。

二文化二言語併用者の場合は、それぞれの言語に対して、別個の神系構造があるに違いない。従って失語症にかかった場合、選択的な (selective) な症状であり、片一方の言語のみに影響を与える事がありうる。一方、一文化二言語併用者の場合には、二言語とも一つの神系構造でつかさどっているに違いない。従って失語症にかかった場合、選択的な症状となる事はありえず、いつでも両方の言語とも影響をうける。

上記の主張はランバート・フィレンバウム自身も言明しているように、あくまでも水先案内的研究 (pilot study) であり、十分な資料と綿密な検証によりなされたものではないが、二文化二言語併用者の場合、言語中枢自体が二つに分かれており、一文化二言語併用者の場合、言語中枢も一つしかないのではないかという説に関連する神系生理学方面からの研究は、ペンフィールド⁹⁾、ミルナー¹⁰⁾あるいはヤコボビッツ・ランドバート¹¹⁾等により盛んにおこなわれており、今後の成果が待たれる。

3. 二文化二言語併用者の話す内容

二文化二言語併用者が話す内容により、無意識のうちに、二言語を使いわけるといふ事は、

ハウゲン¹²⁾やフィッシュマン¹³⁾等が明らかにしてきているが、一方、二文化二言語併用者は、言語により、話す内容が変わるという事も明らかになってきた。仏語と英語の二言語併用者である作家ジュリアン・グリーンは、仏語で書いた自作を英語に翻訳しようとしたが、うまくいかず、結局英語で全く新しい作品を書くにいたったと述懐している¹²⁾。こうした言語による内容の変化が同一個人の中で、二文化二言語併用者の場合、おこるのだという事をエルヴィン¹⁴⁾は実験的に示した。

被実験者は、27才の日系アメリカ人で、0才から8才までと、15才以降はアメリカで生活しており、ほとんど英語で話す環境にいたが、8才から15才の間は日本で生活し、日本で教育を受けた英語と日本語の二言語併用者であり、こうした状況から彼は二文化二言語併用者であるといえる。テストは、一枚の絵をみせ、そこに描かれている事を説明するもの(TAT)と、文完成(sentence completion)から成り立っている。実験は一回目はすべて日本語の状況下で、二回目は同じテストをすべて英語の状況下の中で行われ、一回目と二回目は六週間の間隔をおいて実施された。

TATの結果の一部を紹介する(なお「情景」は絵を説明したものである。「日本語」とは一回目のテストの時の答、「英語」は二回目のテストの時の答をさしている)

○情景：床にすわって、頭は長椅子かベンチのようなものに埋れている、女の人の後姿。

日本語：女の人が死んだ婚約者の事を考え自殺すら考えている所。

英語：A girl tries to complete a sewing project for class。(女子学生が学校の編物の宿題を完成しようとしている所)

○情景：農場で、後方では農夫が畑を耕やしており、その妻とおぼしき女が木によりかかっている。前方には若い女が手に本をかかえて、その情景をみつめている。

日本語：母親が病気で、家計も豊かでなく、父親が一生懸命働いているのに、両親が喜んで自分を大学へ入れてくれる事に悩んでいる娘。

英語：A sociology student observing farmers at work is struck by the difficulty of farm life。(農民の生活ぶりを観察している社会学専攻の学生が農民の生活の苦しさにうたれている所)

次に文完成のテストの一部を紹介する。

日本語：仕事が自分の手に負えない時／「まあしょうがない」とつぶやき、自分にむち打ってなんとかやりとげようとする。

英語：If the work is too hard /for me I'll just quit。(私ならすぐやめる)

日本語：私の一番の喜びは /大学院を卒業出来る事である。

英語：My greatest pleasure /is to be able to lie on the warm sands of the beach out west。(西海岸の暖い砂浜で寝そべっていられる事だ)

上記テストの結果の一部からもわかるように、日本語で行なわれた場合と英語で行なわれた場合には内容の相異が認められる。しかも日本語の場合には、仕事をなんとかやりとげようと

か、家族に対する義理といった様な、日本文化に根ざした内容であり、英語の場合はアメリカ文化に根ざした内容である事がわかる。この事から、二文化二言語併用者は、言語により話す内容が変化するという事は明らかである。エルヴィンは、二文化二言語併用者を、この意味で、二重人格 (double personality) を有しているとさえ言っている。

4. おわりに

二言語併用者は、上記の如く、二文化二言語併用者と一文化二言語併用者という両極端の二つのタイプがあり、その二つの存在は、実験的に明らかにされてきている。そして二文化二言語併用者は言語によりその話す内容も変えてしまうという事も明らかにされてきている。

さて日本では中学校から外国語として英語を学ぶわけであるが、前に述べた如く、このような場合、英語がすばらしく出来るようになったとしても、一文化二言語併用者もしくはその極に近い所の二言語併用者にしか出来ないのではないかと思われる一特に英語を日本語に逐語訳するという作業を授業形態の中に多く取り入れている日本の現状では。この事は外国語を学ぶ事は、それ自体そのことばに反映されている外国の文化に触れる事であるという、英語を学ぶ事の意義とされている事とは相容れないものを含んでいるように思われる。つまり英語で話せたり書けたりしても、英語で聞けたり、読めたりしても、一般の学生は日本文化に根ざした発想の枠の中で行っているだけではないかという事である。もしこの説が正しいなら、外国の文化に触れる事は、数多くの翻訳本を読めば、もっととっとり早く出来るので、外国語教育の目的を、国際共通語としての英語をコミュニケーションの手段として学ぶという実用面に最重点を置いていくべきではないであろうか。又、もし、外国語を学ぶという事で、その文化をも吸収するという事も含めるならば、逐語訳に重点を置く授業方法を根本的に見直し斬新な授業形態の確立をはかるべきであろうと思われる。

このように、二言語併用者の問題は、日本の英語教育の目的に対しても、貴重な資料を提共しているように思われる。

References

1. Weinreich, U. *Language in Contact* 1953. Linguistic Circle of New York.
2. Ervin-Tripp, S.M. "Structure and Process in Language Acquisition." *Language Acquisition & Communicative Choice* 1973. Stanford University Press.
3. Gleason, H. A. *An Introduction to Descriptive Linguistics* 1955. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
4. レヴィ・フリユール 「未開社会の思惟」 山田吉彦訳 1941. 小山書店
5. Ervin, S.M. & C.E. Osgood "Second Language Learning and Bilingualism." *Psycholinguistics: a survey of theory and research problems* 1954 ed. by C.E. Osgood & T.A. Sebeok. Indiana University Press.
6. Lambert, W.E., Havelica, J. and Crosby, C. "The Influence of Language-Acquisition Contexts on Bilingualism." *Journal of Abnormal and Social Psy-*

- chology* 56, 1958.
7. Osgood C.E, G. Suci & P. Tannebaum. *The Measurement of Meaning*, 1957 Urbana.
 8. Lambert, W.E. & S. Fillenbaum. "A Pilot Study of Aphasia among Bilinguals" *Canadian Journal of Psychology* 13, 1959.
 9. Penfield, W. & L. Lamar. *Speech and Brain Mechanism* 1959. Princeton University Press.
 10. Milner, P.M. "The Cell Assembly" *Psychological Review* 64, 1957.
 11. Jakobovits, L. & W. Lambert. "Semantic Satiation among Bilinguals" *Journal of Abnormal and Social Psychology* 14, 1962.
 12. Haugen, E. *Bilingualism in the Americas* 1956. University of Alabama Press.
 13. J. フィッシュマン 「言語社会学入門」 湯川恭敏訳 1972. 大修館書店
 14. Ervin-Tripp, S.M. "Identification and Bilingualism" *Language Acquisition and Communicative Choice* 1973. Stanford University Press.